

富山・東木津遺跡（第二二号）

告する。またSD六〇からは漆紙文書も出土しているので、あわせて揚げる。

遺物包含層

所在地	富山県高岡市木津・佐野
調査期間	一九九八（平10）年六月～一九九九年四月
発掘機関	高岡市教育委員会
調査担当者	荒井 隆
遺跡の種類	集落跡・官衙跡
遺跡の年代	弥生時代～中世
木簡の記文・内容	

東木津遺跡は、高岡市中心部、小矢部川と庄川に挟まれた、標高一一〇～一二〇mの微高地上に位置する。古代における本遺跡は、八世紀後半～九世紀前半を主体とし、九世紀末まで存続したと考えられる。遺構は掘立柱建物二〇棟・護岸施設や橋梁遺構を持つ自然流路（SD一〇五）・道路一條などがある。遺物は土師器・須恵器や、斎弔などの木製品などである。墨書き土器は、本誌第一二号で紹介したもの以外に、「川相」「大」「平」「船木」がある（なお、報告書（関係文献参照）では遺構番号を整理し、SD一〇五はSD六〇と改称している）。

今回は本誌第一二号で紹介した木簡八点のうち、保存処理後に墨痕がはつきりし、また高岡市万葉歴史館の川崎晃氏のご指摘により、訂正があつた木簡二点(1)(2)、新たに判明した木簡二点(3)について報

- (1) 「氣多大神宮寺涅槃淨土紙布米入使」
 ・「□曆二年九月五日廿三枚入布師三□」
 154×21×5 011(1)*
- (2) 「はルマ止左くや古乃は□」
 SD一〇六〇
 250×34×15 011(2)

(3) 「▽□子四斗」

28×17×3 033

(1)は、本誌第一二号掲載時点では、表面の「氣多大神宮寺」の部分がはつきりと釈読できず、伊勢神宮を想定していたものである。

氣多大神宮寺は、石川県羽咋市寺家に所在し、能登国一宮である氣多神社に付属する神宮寺と考えられる。高岡市伏木にも越中國一宮の一つである氣多神社があり、そちらである可能性もあるが、「文徳天皇実録」齊衡二年（八五五）五月辛亥条に「能登國氣多大神宮寺」と見え、また神宮寺の規模も勘案すると、能登国の氣多神社と考えるのが穏当である。「紙布」は、一文字で紙の異体字である可能性（本誌第一二号）の他、一文字で「紙布」と理解する見方もある（川崎論文参照）。裏面の「□曆」の年号は、残画とスペースの関

係から、「正暦」の可能性がある。正暦二年は西暦九九一年にあたる。「布師三□」は、人名と考えられる。「三□」の「□」は、門構えが確認できる。越中国射水郡には布師郷が存在しており（『和名類聚抄』、高岡市須田藤の木遺跡出土木簡（本誌第三二号）、本木簡に書かれた人物は、この布師郷に由来する人物と考えられる。

(2)は、難波津の歌の下句である。難波津の歌は、『古今和歌集』の仮名序に、手習い歌として記される著名な歌である。第二字目の片仮名の「ル」は、平安時代初期の訓点資料にみられる。「□」は「七」あるいは「奈」であると考えられる。木簡の年代は、遺跡の存続時期と書体から、九世紀後半から一〇世紀前半の間と考えられる。

(3)は、物品名と量を記す。本誌第二一号で紹介した(9)「<□□一
[石一斗カ] □□□」や、(10)「<白□」などと形態が類似することから、種穀名を記したものである可能性がある。

漆紙文書



いずれも須恵器杯A内面に付着した漆紙文書である。□縁部周辺



(荒井 隆・岡田一広)

川崎晃「『越』木簡覚書—飛鳥池遺跡出土木簡と東木津遺跡出土木簡」（『高岡市万葉歴史館紀要』一一二〇〇一年）
高岡市教育委員会『石塚遺跡・東木津遺跡調査報告』（二〇〇一年）

の、漆樹脂が紙に薄く皮膜している部分のみ文字が確認され、杯内部のものは、漆樹脂が多量に付着し、文字の有無は不明である。いずれも紙の表面が下になつてお、上部から見ると鏡文字になつてゐる。判読できた文字はBの墨界線と「大」のみである。

なお、木簡・漆紙文書の釈読は、奈良女子大学の館野和己氏、奈良文化財研究所の渡辺晃宏氏・吉川聰氏・馬場基氏による。また、本稿の作成にあたつて、川崎晃氏から教示いただいた。

8 関係文献